

貧乏神

兵庫県

ある節分せつぶんの晩、おやじさんがいろりにあたっていると、天井てんじやうからひとりのじいさんが下りてきました。おやじさんは、じいさんが急に現れたのでびっくりして、こわごわ見ていると、じいさんはいいました。

「おれは、貧乏神だ。おまえのうちに、長いことお世話になった。だが、もう、暇ひまをもらうことにした。それで、なんぞお礼をしたいと思います。明日の朝、このうちの前の道を、馬が三匹通る。初めの馬は、金きんを一貫いっかん積んでいる。つぎの馬は、銀を一貫積んでいる。終しまいの馬は銅を一貫積んでいる。そのうちのどれでもひっくり返したら、それがおまえのものになる」じいさんは、そういうと、家から出て行きました。おやじさんは、よろこんで、朝になるのを待ちました。

いよいよ、あくる朝、早くから起きて、家の前の道に出て、棒ぼうをさげて馬が来るのを待っていました。すると、向こうから、金を積んだ馬が元氣よくやって来ました。おやじさんは棒をかまえました。馬をひっくり返すことができませんでした。馬は走っていきましました。

しばらくすると、銀を積んだ馬がえらい勢いきばたいで走って来ました。おやじさんは、今度こそと棒をふり上げましたが、これもひっくり返すことができませんでした。

そこへ、銅を積んだ馬が走って来ました。おやじさんは、やっぱりひっくり返すことができません。かわりに、そのあとから、とんぶりとんぶり歩いてきたじいさんをひっくり返してしまいました。それは、きのう家を出て行った貧乏神でした。貧乏神は、

「今年もまた、お世話にならしてもらいます」といって、おやじさんの家に入って行きましたとさ。

おしまい。

村上郁再話

資料『昔話研究2―8』「城崎郡昔話」西谷勝也／民間傳承の會